

C 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一～三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	
○	1
○	2
●	3
○	4
○	5

(3と解答する場合)

※

大問一・二については著作権の関係により掲載できません。
引用した文章は次の通りです。

- ・大問一 西垣通・河島茂生『AI倫理 人工知能は「責任」をとれるのか』
- ・大問二 松田素二『アフリカのフィールドワーク——人文学のもう一つの方法』

三 左の文章は、『落窪物語』の一節で、落窪の姫君（君、女君、女）の暮らしぶりの一端が書かれている場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

ほどは、十一月二十三日のほどなり。^(注1) 三の君の夫の蔵人の少将、にはかに臨時の祭の舞人にさされたまひければ、^(注3) 北の方、手惑ひしたまふ。^(注4) あこぎ、論なう御縫物もて来なむものと胸つぶるるもしるく、表の袴裁ちて、^(注5) 「これ、ただ今縫はせたまへ。御縫物出で来なむ」と聞こえたまふ」と言ふ。君は几帳のうちに臥したまへれば、あこぎぞ、。「いかなるにか。昨夜より悩ませたまひて、うちやすませたまへり。今、起きさせたまひなむ時に聞こえさせむ」と言へば、使帰りぬ。女君、「縫はむ」とて起きたまふ。「まろ一人は、いかでつくづくと臥いたらむ」とて、起こしたてまつりたまはず。

北の方、「いかに。縫ひたまひつや」と問ひたまへば、「さもあらず。『まだ御とのごもりたり』と、あこぎが申しつるは」^(a) と言へば、北の方、「なぞの『御とのごもり』ぞ。物言ひ知らずなありそ。我らとひとつ口に、なぞ言ふは。聞きにくく。あなわかわかの昼寝や。しが身のほど知らぬこそ、いと心憂けれ」とて、うちあざ笑ひたまふ。

下襲裁ちて、持ていましたれば、⁽⁵⁾ おどろきて、几帳の外に出でぬ。見れば、表の袴も縫はで置きたり。⁽⁶⁾ けしきあしうなりて、「手をだに触れざりけるは。今は出で来ぬらむとこそ、思ひつれ。あやしう、おのが言ふことこそ、あなづられたれ。このごろ御心そり出でて、化粧ばやりたりとは見ゆや」とのたまへば、女、いとわびしう、いかに聞こえむと、我にもあらぬ心地して、「悩ましうはべりつれば、しばしためらひて」とて、「これはただ今出で来なむものを」とて引き寄すれば、「おどろき馬のやうに手な触れたまひそ。人だねの絶えたるぞかし。^(注8) かううけがへなる人にのみ言ふは。この下襲もただ今縫ひたまはずは、ここにもなおはしそ」とて、腹立ちて、投げかけて立ちたまふに、少将の直衣の、後のかたより出でたるを、ふと見つけて、「いで、この直衣はいづこのぞ」と立ちとまりてのたまへば、あこぎ、いとわびしと思ひて、「人の縫はせに奉りたまへる」と申せば、「ま

づ外の物をしたまひて、ここのをおろかに思ひたまへる。⁽⁸⁾もはら、かくておはするに、かひなし。あなしらじらの世や」とうちむつかりて行く後手、⁽⁹⁾子多く生みたるに落ちて、わづかに十すぢばかりにて、居丈なり。^(c)うちふくれて、いとをこがましと、少将つくづくとかいまみ臥したり。
女、あれにもあらで、物折る。^(注10)少将、衣の裾をとらへて、「まづおはせ」とひき責むれば、わづらひて入りぬ。
「憎し。⁽¹⁰⁾な縫ひたまひそ。今少し、あらだてて惑はしたまへ。この言葉はなぞ。この年ごろはかうや聞こえつる。
いかで堪へはべらむ」とのたまへば、女、「山なしにてこそは」^(注11)と言ふ。

(注)

- 1 三の君——落窪の姫君の異母妹。
- 2 臨時の祭——賀茂神社の臨時祭。
- 3 北の方——落窪の姫君の継母。姫君を使用人のように扱っている。
- 4 あこぎ——落窪の姫君に仕える忠実な侍女。
- 5 「これ、ただ今縫はせたまへ。御縫物出で来なむ」と聞こえたまふ——北の方の使者が来て北の方の言葉を伝えている。
- 6 君は几帳のうちに臥したまへれば——君は落窪の姫君を指している。姫君のもとに恋人の少将（三の君の夫の少将とは別人）が来ていて共に休んでいる。
- 7 まろ——少将の一人称。
- 8 人だね——縫い物をする人材。
- 9 わづかに十すぢばかりにて、居丈なり——髪の状態の表現。居丈は座ったときの身の丈。
- 10 物折る——縫い物を折ること。
- 11 山なし——身を隠す山がない。どこにも行くところがない。

問

(A) — 線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 できる限り縫い物の仕事をしなくてはならない。
- 2 きつと縫い物の仕事を持ち込んで来るに違いない。
- 3 争いを避けるために縫い物の仕事を引き受けよう。
- 4 とりあえず縫い物の仕事を頼まれるだろう。
- 5 せめて縫い物の仕事だけでも分担させてほしい。

(B) 空欄 に動詞「いらふ」を最も適当な活用形で記せ。

(C) — 線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 眠りが浅くていらつしゃつて
- 2 縫い物でお疲れになつて
- 3 祭に間に合うかご心配になつて
- 4 ご体調が悪くなられて
- 5 占いの結果に落胆なさつて

(D) — 線部(3)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 申し上げます。
- 2 聞こえるでしょう。
- 3 お尋ねになるでしょう。
- 4 お伝えしましょうか。
- 5 お申しつけください。

(E) 〓 線部(a)～(c)の助動詞の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- | | | | |
|------|------|---------|------|
| 1 受身 | 2 打消 | 3 可能 | 4 完了 |
| 5 意志 | 6 断定 | 7 伝聞・推定 | |

(F) 〓 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 言葉遣いを知るわけがないだろう。
- 2 言葉遣いを知らないはずはないだろう。
- 3 言葉遣いを知らずにいてはいけない。
- 4 言葉遣いを知るのに遅いことはない。
- 5 言葉遣いを知らなくても気にしてはいけない。

(G) 〓 線部(5)は誰の動作・行為か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 北の方
- 2 三の君
- 3 あこぎ
- 4 姫君
- 5 少将(姫君の恋人)

(H) 〓 線部(6)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 あこぎの段取りがひどくて
- 2 天候が悪くなつて
- 3 姫君の顔色があおざめて
- 4 部屋が散らかっていて

5 北の方のきげんが悪くなって

(I) ——— 線部(7)が指している内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 北の方が姫君の言葉遣いをとがめたこと。

2 北の方が姫君に縫い物を命じたこと。

3 北の方があこぎに伝言を頼んだこと。

4 北の方が姫君に化粧を勧めたこと。

5 北の方があこぎに昼寝を禁じたこと。

(J) ——— 線部(8)の現代語訳を四字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(K) ——— 線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 背をまるめながら

2 うっかりつまずきながら

3 怒って小言を言いながら

4 悲しい気持ちを表しながら

5 思わずくしゃみをしながら

(L) ——— 線部(10)について、このように述べた理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 姫君に対する三の君の配慮が不十分だったから。

2 姫君に対する北の方の言動がひどかったから。

3 北の方に対する姫君の態度が失礼だったから。

4 北の方に対する少将の愛情が足りなかったから。

5 少将に対する北の方の策略が予想外だったから。

(M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 蔵人の少将は臨時の祭の舞人に任命されたが辞退した。

ロ 少将は縫い物に取り掛かろうとする姫君に手を貸した。

ハ 北の方は姫君のもとを訪れて縫い物の進み具合を尋ねた。

ニ 北の方の馬は臆病で驚いては人間を手こずらせた。

ホ 少将は立ち去る北の方の姿を横になったままのぞき見た。

【以下余白】

